

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530823

研究課題名(和文) 中学生の社会認識構造の変容過程とその形成に関する縦断的発達研究

研究課題名(英文) A Longitudinal Study on the Development and Formation of Structures of Social Cognition in Junior High School Students

研究代表者

加藤 寿朗(KATO TOSHIAKI)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：30274301

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会認識形成に関する縦断的調査を通して、社会認識形成過程の仕組みやその特徴、認識発達を促進する教育的働きかけについて検討することを目的とする。子どもの社会認識発達の特徴としては、1)中学生の社会認識の発達は量的増加と共にいくつかの質的に異なった発達段階に区切られること、2)中学校2,3年生頃を移行期として子どもの思考力・判断力が発達すること、が想定される。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the mechanism of and characteristics for the process of formation of children's social cognition through a longitudinal study. The predicted characteristics of the development in children's social cognition are：1) the development of social cognition of junior high school students can be divided into several qualitatively different phases; 2) logical thinking and judgment of junior high school students develops through the transition period of the eighth and ninth grades.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：社会認識発達, 調査研究, 社会科教育

1. 研究開始当初の背景

子どもの社会認識(社会の見方・考え方)の発達の解明とそれに即した授業実践は、科学的な社会認識の育成を目指す社会科教育の基礎的かつ重要な研究課題だといえる。また、現行の中学校社会科学学習指導要領では、「児童生徒の発達段階を踏まえ、各学校段階の特色を一層明確にして内容の重点化を図る」(文部科学省『中学校学習指導要領解説—社会編—』大阪書籍, 1999年)ことが改善の基本方針としてあげられており、生徒の発

達やその実態に即した弾力的な指導がこれまで以上に各学校に対して求められている。これらのことから、生徒の社会認識の発達とそれに即した授業改善に関する実証的かつ具体的な提言が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、子どもの社会認識の発達に即した社会認識形成の基礎理論を検討・構築するために、社会認識の発達プロセスに関する実証的データを収集することを目的とする。

3. 研究の方法

上記「研究の目的」を達成するために、主として以下の4点に関する研究を行った。

- (1) 社会認識発達とその形成を扱った国内外の著書・論文・資料の収集と分析。
- (2) 中学生の社会認識構造（社会のわかり方）を測るための調査問題の開発。
- (3) 中学生の社会認識構造の変容過程を解明するための調査の実施。
- (4) 中学生の社会認識発達とその形成（発達を促進する条件及び指導方略）についての具体的な検討。

調査（(2)～(3)）の手続きは以下の通りである。

(2) 調査問題の開発

① 中学生の社会認識発達を測る予備調査問題（公民問題と歴史問題）の作成

② 予備調査の実施と結果分析

③ 中学生の社会認識発達を測る調査問題と分析方法の確定

(3) 発達調査の実施

① 調査計画の立案

これまで行った横断的調査の方法的課題の検討、縦断的調査の調査計画を立案、調査校の決定、調査校へ研究協力の依頼

② 1年次調査の実施

調査結果の整理と分析

③ 2年次調査の実施

調査結果の整理と分析

4. 研究成果

本研究では「中学生の社会認識の発達」を、教科指導を通じた「中学生の思考力・判断力の形成・発達」に変換して考察を行った。以下は、(1)「中学生の思考力・判断力の形成・発達」を測るために開発した調査問題、(2)調査結果、(3)調査を通して明らかになった中学生の社会認識発達の特徴、(4)今後の課題、である。

(1) 開発した調査問題の構成

社会科で育成をめざす「思考力・判断力」は、社会的事象に関する「知識」と、問いの構成と資料活用の技能を基盤とする「思考技能」とが一体化した能力である。授業で、教師と生徒の間でやりとりされる社会的事象に関わる知識は、以下の6層から成る「構造」として把握できる。

① 事象記述：特定の事象に関する事実そのものを記述した知識。

② 事象解釈：特定の事象に関する事実を解釈し、因果、目的結果、意義などを説明した知識。

③ 時代解釈：個別の事象（事実）の解釈を総合して広い時間的範囲にある時代の社会の特色を説明した知識。

④ 社会の一般理論：個々の事象の起因や影響

を説明するのに用いられる一般的概念的な知識。

⑤ 価値的知識：個々の事象を、解釈内容をふまえて評価的・規範的に判断した知識。

⑥ メタ知識：知識構成の背後にある立場や価値観を吟味し解釈した知識。

社会科における「知識」「思考技能」「思考力・判断力」を分析的に、相互関連的にとらえることにより、調査で評価しようとする子どもの思考力・判断力の質・内容を視点に設定したテスト問題の類型は以下の3つである。

① 社会認識力評価型

社会的事象に関する事実を資料に基づいて確定し、それらの事実間の関係や事象の本質を推論することを通して解釈し説明できる能力を評価する問題

② 社会的判断力評価型

社会的（歴史的）論争問題に対応する複数の政策・行為の選択肢を、事実を根拠に評価し選択していく能力を評価する問題

③ 批判的思考力評価型

文字・図像・映像・音声などにより示される、社会的事象に関する言説の背後にある価値観や立場、あるいは言説の構成方法を、時代の社会の特質と関わらせて読み解き吟味していく能力を評価する問題

予備調査の結果をふまえて開発した問題は以下の5つの問題からなり、公民問題と歴史問題のそれぞれを開発した。

問題1：社会認識力評価型事実判断問題

問題2：社会認識力評価型帰納的推論問題

問題3：社会認識力評価型演繹的推論問題

問題4：社会的判断力評価型問題

問題5：批判的思考力評価型

(2) 調査結果

以下は、歴史問題と公民問題のそれぞれについて、学年進行に伴い各問題解決に使用する思考力・判断力のレベルも上昇するか否か、また歴史と公民の分野で使用される思考力・判断力に分野間で違いがあるか否かを検討した結果である。なお、問題1については生徒の回答数を得点化（0点から6点）し、問題2から問題5では、回答を質に着目しながらレベル0、1、2の3段階に分類したものである。

① 社会認識力評価型事実判断問題の結果

回答について2（分野：歴史、公民）×3（学年：1年生、2年生、3年生）の分散分析を行った（図1）。その結果、学年間に差がみられ、3年生の指摘数（平均値= 2.78）が最も多く、次いで1年生（平均値= 2.47）となり、2年生（平均値= 2.00）が最も少なかった。分野と学年の組み合わせによる違い（交互作用）を検討した結果、歴史問題では、3年生（平均値= 2.76）と1年生（平均

値= 2.62) が2年生(平均値= 1.93)よりも多く指摘した。公民問題では、3年生(平均値= 2.80)が1年生(平均値= 2.33)や2年生(平均値= 2.08)よりも多く指摘した。また、1年生では歴史問題の指摘数が公民問題の指摘数よりも多かったが、2年生と3年生では分野間に違いはみられなかった。

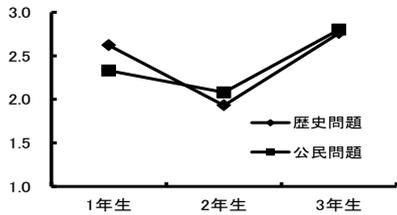


図1 社会認識評価型事実判断問題の平均回答数

②社会認識力評価型帰納的推論問題の結果
分野別に3(レベル: 0, 1, 2)×3(学年: 1年生, 2年生, 3年生)の χ^2 検定を使用して、問題2の回答における帰納的推論の各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討した(図2)。その結果、歴史問題では、レベル1に分類された人数割合は、1年生(56.3%)で多く、3年生(35.2%)で少なかった。逆に、レベル2では、1年生(40.5%)で少なく、3年生(60.7%)が多かった。公民問題では、レベル1の人数割合は、2年生(34.4%)で多く、3年生(16.2%)で少なかった。逆にレベル2では、2年生(54.4%)で少なく、3年生(76.4%)が多かった。学年別に3(レベル: 0, 1, 2)×2(分野: 歴史, 公民)の χ^2 検定を使用して、問題2の帰納的推論のレベルが分野間で異なるか否かを検討した(図2)。その結果、レベル1の人数割合は、歴史問題(1年生: 56.3%, 2年生: 51.2%, 3年生: 35.2%)で多く、公民問題(1年生: 25.4%, 2年生: 34.4%, 3年生: 16.2%)で少なかった。逆にレベル2では、歴史問題(1年生: 40.5%, 2年生: 41.1%, 3年生: 60.7%)で少なく、公民問題(1年生: 59.0%, 2年生: 54.4%, 3年生: 76.4%)が多かった。また、1年生ではレベル0でも分野間の偏りがみられ、歴史問題(3.2%)で少なく、公民問題(15.6%)が多かった。

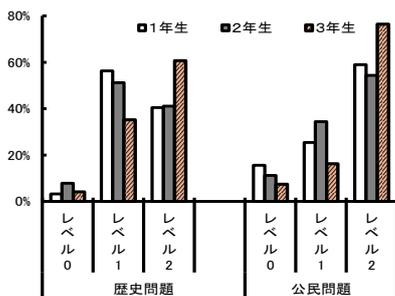


図2 社会認識評価型帰納的推論問題の回答者率

③社会認識力評価型演繹的推論問題の結果
分野別に3(レベル: 0, 1, 2)×3(学年: 1年生, 2年生, 3年生)の χ^2 検定を使用して、問題3の回答における演繹的推論の各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討した(図3)。その結果、歴史問題では、レベル0の人数割合は3年生(37.4%)で少なかった。また、レベル1の人数割合では、1年生(31.3%)で少なく、3年生(48.0%)が多かった。レベル2では、2年生(6.5%)で少なかった。公民問題では、レベル1の人数割合は、2年生(52.6%)で多く、3年生(48.6%)で少なかった。逆に、レベル2では、1年生(11.1%)で少なく、3年生(39.6%)が多かった。次に、学年別に3(レベル: 0, 1, 2)×2(分野: 歴史, 公民)の χ^2 検定を使用して、問題3の演繹的推論のレベルが分野間で異なるか否かを検討した(図3)。その結果、レベル0の人数割合は、歴史問題(2年生: 51.6%, 3年生: 37.4%)で多く、公民問題(2年生: 25.9%, 3年生: 11.8%)で少なかった。逆にレベル2では、歴史問題(2年生: 6.5%, 3年生: 14.6%)で少なく、公民問題(2年生: 21.6%, 3年生: 39.6%)が多かった。また、1年生のレベル1の人数割合は、歴史問題(31.3%)で少なく、公民問題(52.1%)が多かった。

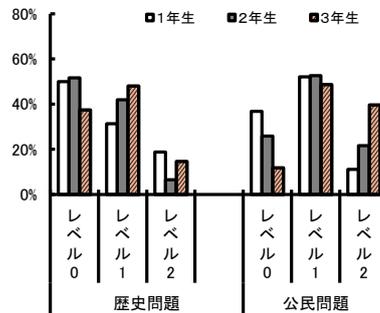


図3 社会認識評価型演繹的推論問題の回答者率

④社会的判断力評価型問題の結果
分野別に3(レベル: 0, 1, 2)×3(学年: 1年生, 2年生, 3年生)の χ^2 検定を使用して、問題4の回答における価値判断・意思決定の各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討した(図4)。その結果、歴史問題では、レベル1の人数割合は1年生(45.7%)で多く、3年生(26.2%)で少なかった。逆に、レベル2では、1年生(46.5%)で少なく、3年生(67.8%)が多かった。公民問題では、学年差はなかった。学年別に3(レベル: 0, 1, 2)×2(分野: 歴史, 公民)の χ^2 検定を使用して、問題4の価値判断・意思決定のレベルが分野間で異なるか否かを検討した(図4)。その結果、レベル0の人数割合は、歴

史問題（1年生：7.9%，2年生：12.1%，3年生：6.0%）で多く、公民問題（1年生：1.6%，2年生：2.3%，3年生：1.4%）で少なかった。

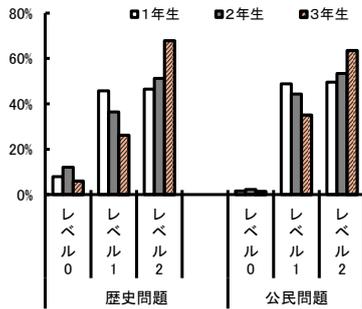


図4 社会的判断力評価型問題の回答者率

⑤ 批判的思考力評価型問題の結果

分野別に3（レベル：0，1，2）×3（学年：1年生，2年生，3年生）の χ^2 検定を使用して、問題5の回答における批判的思考力の各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討した（図5）。その結果、歴史問題のレベル0の人数割合は、1年生（29.8%）で多く、3年生（11.8%）で少なかった。また、レベル1では2年生（28.4%）で多く、レベル2では3年生（74.3%）が多かった。公民問題のレベル0の人数割合は、2年生（13.0%）で多く、3年生（2.7%）で少なかった。また、レベル1では1年生（64.0%）で多く、レベル2では1年生（26.4%）で少なく、3年生（46.6%）が多かった。学年別に3（レベル：0，1，2）×2（分野：歴史，公民）の χ^2 検定を使用して、批判的思考力のレベルが分野間で異なるか否かを検討した。その結果、レベル0の人数割合は、歴史問題（1年生：29.8%，3年生：11.8%）で多く、公民問題（1年生：9.6%，3年生：2.7%）で少なかった。レベル1では、歴史問題（1年生：14.0%，2年生：28.4%，3年生：14.0%）で少なく、公民問題（1年生：64.0%，2年生：55.7%，3年生：50.7%）が多かった。レベル2では、歴史問題（1年生：56.1%，2年生：56.9%，3年生：74.3%）で多く、公民問題（1年生：26.4%，2年生：31.3%，3年生：46.6%）で少なかった。

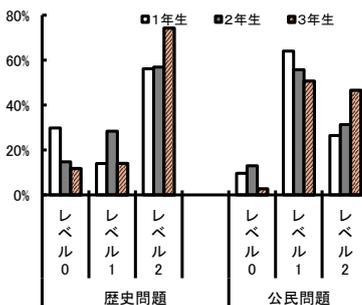


図5 批判的思考力評価型問題の回答者率

(3) 中学生の社会認識発達の特徴

中学生の社会認識発達の特徴として次の3点が明らかになった。

一点目は、中学生の思考力・判断力（社会認識力，社会的判断力，批判的思考力）は，学年進行に伴って高くなることである。二点目は，中学生の思考力・判断力は，特に2年生から3年生にかけて伸長する傾向が見られることである。このことは，社会認識力（帰納的推論，演繹的推論），批判的思考力においてより顕著である。三点目は，同じ到達基準でも分野によって到達している人数に違いが見られることである。このことは，分野によって到達しやすい問題とそうでない問題があることを意味している。以上の結果は，中学生の社会認識発達の連続性（学年進行に伴う思考力・判断力のレベルが上昇）と不連続性（能力が著しく伸長する時期の存在や分野による特殊性）という特徴を示唆している。このことから，青年期の社会認識発達には量的増加と共に質的に異なった段階（質的な転換）が仮定される。

(4) 今後の課題

本研究は，中学生が社会を認識していく内的過程とその発達の傾向について縦断的調査を通して検討したものであり，経験的ではなく科学的実証性を有した指導理論の構築に発展させる可能性を有している。今後これらの発達調査の結果に基づいて，子どもの社会認識発達に即した社会認識形成の基礎理論を検討・構築するとともに，中学校社会科の授業改善，授業構成の視点を具体的に提示することが必要である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①加藤寿朗, 梅津正美, 前田健一, 新見直子, 中学生の社会認識の発達に関する調査的研究 (I), 社会認識教育学研究, 査読有, 26号, 2011, (印刷中)

②前田健一, 加藤寿朗, 梅津正美, 新見直子, 中学生の批判的思考力と社会的事象に対する関心・意欲および社会的態度, 広島大学心理学研究, 査読有, 10号, 2011, (印刷中)

③加藤寿朗, 和田倫寛, 子どもの社会認識発達に基づく小学校社会科授業の開発研究, 社会系教科教育学研究, 査読有, 21号, 2010, pp. 1-10

④加藤寿朗, 子どもの認識研究の方向・方法はどうか変わるか, 社会科学研究, 査読無, 609

号, 2010, pp. 68-71

⑤加藤寿朗, 吉崎朗, 子どもの社会認識発達に基づく小学校社会科授業モデルの開発研究, 社会科研究, 査読無, 29号, 2008, pp. 11-22

〔学会発表〕(計2件)

①加藤寿朗, 梅津正美, 中学生の社会認識の発達に関する調査的研究, 日本社会科教育学会第60回全国大会自由研究発表, 2010年11月13日, 筑波大学

②加藤寿朗, 子どもの社会的認識と社会科教育, 日本教育心理学会第52回総会自主シンポジウム, 2010年8月28日, 早稲田大学

〔図書〕(計2件)

①加藤寿朗, おうふう, 子どもはどう考えるかー認知心理学からみた子どもの思考ー, 2010, pp. 127-146

②加藤寿朗, 明治図書, 「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン, 2009, pp. 14-21

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 寿朗 (KATO TOSHIAKI)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号: 3 0 2 7 4 3 0 1

(2) 研究分担者

梅津 正美 (UMEZU MASAMI)
鳴門教育大学・学校教育学部・教授
研究者番号: 6 0 2 8 4 3 2 9

前田 健一 (MAEDA KENICHI)
広島大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号: 9 0 1 0 1 4 5 1

(3) 連携研究者

()

研究者番号: